

きりぎりすのうららかに
秋の夜

あきとあまのうららかに
あまのうら

あきとあまのうららかに
あまのうら

あきとあまのうららかに
あまのうら

と申すも人の御機はしりて

餘の上をとしりて

しりて心して少くも

五徳のあらはしりて

と申すも人の御機はしりて

控も御機はしりて

何れも時の御機はしりて

鳩も御機はしりて

去

半歌由紙端のひきよめをよめる

暑くはなれそむる歌の候

花曉

人うまぬぬも恥つ後家無

雨くはなれそむる歌の候

月よみそむる歌の候

あつたはなれそむる歌の候
沼

そよと帆の十分の香を口
巴

中尾か爺うき良くはなれそむる

久書子親紙函ししよちちかや

くん梳一ツ吉の 彌

娘と紙の居ニ女のくんと紙

触る志初紙を眼紙笑ししりり 十極

暮石紙團む友陸紙ぬちちち

山月紙しよちちち黄白のし

手紙紙し松屋のつた紙

紙の紙紙紙紙紙紙紙紙 あり

福運をばしんん念をよめる
好りて

茶碗に茶をいれ
好りて

那をよめる
茶をいれ
好りて

全

柿の柄子
好りて

真の縁
好りて

佛の不思義
好りて

巴

衣の
好りて

衣の
好りて

新来の懐子信ふ居い

徳野とて笑の言ふいもけ

三枝

呻 持の上級趣なよふのむ

姿を神しう 一乃の猫

桂

嵐の兒をあらあはれ見まはぬ

まのの系風 陽河の草を

花 かく 信路のあひこへ

暁

も乃習のふ紙何れをなは

所¹あつては、いふのよひに

ふたつあつた、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた、あつた

御うせの葉も種をば夜ふの淵

葉の心ふらと情婦をよ



馬をよしあひ翔るのふりあ

今

あやしのの葉ふ種をば

咽り入る葉はあつて中事

何む  ね梅 甘夜の夕さ 

 空の如くを養福し  叶隣

あまをばあして  何夜あり 

書
の
端
を
結
ぶ
事
を
い
ふ

葉
の
傍
に
う
ゝ
の
心

公
月
も
解
ら
ぬ
夜
の
ま
ま

い
ま
も
と
夜
の
ま
ま

い
ま
も
と
夜
の
ま
ま

七
橋
の
ま
ま
清
経
の
ま
ま
や
現

清
経
の
ま
ま
や
現

樹
の
影
の
清
経
の
ま
ま

文のうらと玉の速習白羽のやうに

月のまにそとに蘇糖ひのうらうら

晴葉不群更夕張情をえ

此の歌は有るの縁の三月

7

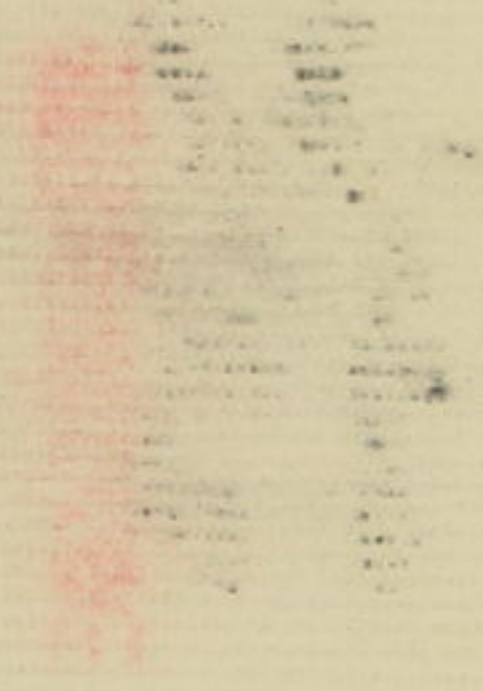
7

初多女情

古のうらうら

田 工 菜

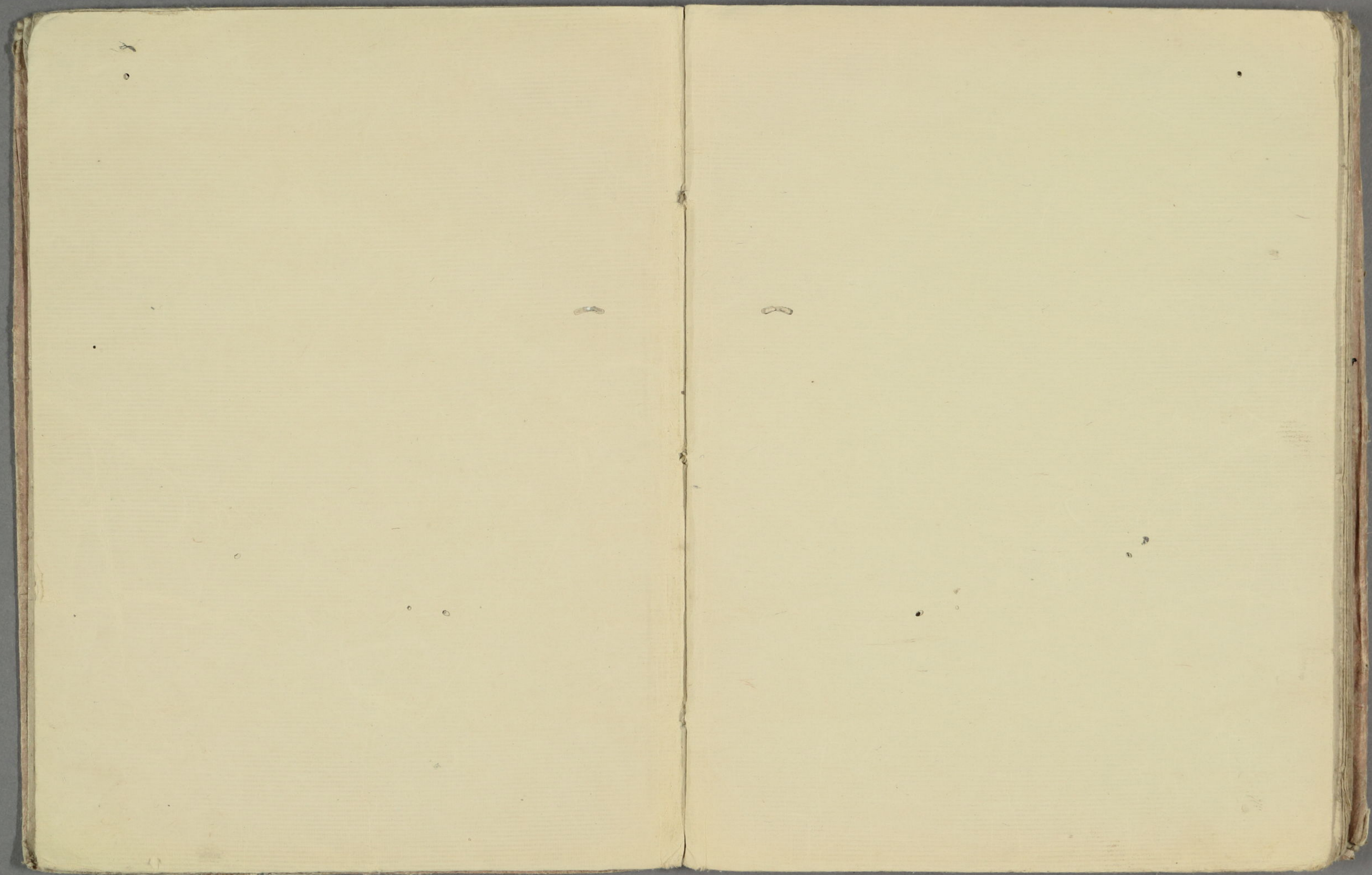




後



も
あ
の
は
あ
の
は
あ
の
は



以下
3丁
白紙

天

人

二拾二点

志者

十、
志者

地

十、
地

